
学校を、奪い取れ！

江美里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学校を、奪い取れ！

【Nコード】

N3493G

【作者名】

江美里

【あらすじ】

6・2のクラスメイトが学校を奪い取る！？「先生達よ、我等に勝てるかな？」子供達、頑張れ！と、いつの間にか、応援してた！なんて小説になるよう頑張ります！

プロローグ

私たちは、考えた。

どんな方法で先生に仕返しするかを……。

6・2 放課後会議。

夏休みも近くなると、先生への不満も増え、クラスは、

「やっぱ、そう思うだろ。」「やっぱ思うよね。」

と、ある意味団結してくる。このメンバーたちは、

「なら、先生をやっつけよう!」

と、まとまり、今、放課後に会議している。

「誰か、意見ある?」

愛海あみを司会に、皆が意見する。

「今のところ、全部実現できないけどね。どーする?」

「……」

「しゃーない、学校を奪い取る。やってみよう。」

私はそう言った。

「……」。うん。いいよね!?」

「おー!」

第一話・大戦には犠牲がつきもの！？（前書き）

やっと第一話です。

第一話：大作戦には犠牲がつきもの！？

「学校を奪い取るのはいいいけど、どうやって？」
と、誰かが言い出す。すると、

「うーん……」

授業の時より真剣に、皆が悩む。

誰も何も言わずに悩むこの姿を見たら、先生方は何と言っただろう。
持ち込み禁止のシャーペンの音が、クラス内に響く。

誰か、図でも描くのだろうか。しばらくして。

「よし！」

秋穂が叫ぶ。

「あのさ、夏休みなら、皆せんせいたちいない日もあるでしょ！その日に忍び込むの！」

「でも、いない日分かんないじゃん。それだけ聞いたら怪しいし……」

「あ、そっかー。いいと思ったのに……」

「私になんとかするっ！」

「へ？」

いきなり瑠璃が叫ぶ。皆驚いている。

「じゃ、夏休み前日に連絡しまーす！」

その日は解散になった。

夏休み前日。

私に瑠璃から連絡がきた。

「なに？どうしたのよ。」

「七月七日。七夕の日だけ、情報報告会で違う学校で話し合っただって。」

「その日を狙えと。たしかにいいわね。決定。皆に連絡しといて。」

「連絡網、全把握してる、誰かさんに頼むから。」

「ふーん。わかった。じゃ、よろしくね。」

「何言ってるの？江美里が連絡するんだよ？そいつに。」

「………私かい。にしても、何故わかる。」

「あのー、忘れ物しちゃって………都合の悪い日あります
か？」って聞いたの。

とても優しく親切に教えてくれたわ。騙されやす〜！」

「………それはアンタの演技のせいだよ。」

「とにかくよろしくね〜。」

「は〜い。」

この後、例の誰かさんに連絡した江美里が、

「自分で連絡しろ！俺に言うな！」

と、説教されたのは、また、次のお話です。

………笑い事じゃないんだけどね。

第一話：大作戦には犠牲がつきもの！？（後書き）

実は、この話の瑠璃や、漢字決まらず次回登場の女の子（一人称俺の女の子）はモデルあります。（笑）

ほかになりたい方いらしたら・・・

教えてください。（いるわけありませんが。）

喜んで迎えさせていただきます。

第二話・電話。ついでに目的再確認。(前書き)

遅すぎますね……………。
御免なさい。

第二話：電話。ついでに目的再確認。

「まったく。連絡係じゃねーぞ、俺は！」

「そーだけどー。」

「なら、自分で連絡しろ！」

この男子口調の人間は、以外にも女子であり、ゆすは柚葉という名だ。口調や格好を変えればかなり可愛くなると私、江美里は思っている。ただし、かなり性格を変えなければいけないが。ついでに言つと、さっきの瑠璃もかなり可愛い。

表裏の激しいため、裏の性格を何年も隠し通せばの話だが。

余談だが、江美里の見た目に関してはこの二人を書いた後に書く、書く私が絶望したくなる、と書いておけば、察してくださいさるだろう。

「アンタも暇でしょ？ちよつとぐらい……………」

「無理。だいたい、俺じゃなくなつて……………」

「じゃあ、柚葉は連絡網の30番までお願いね。残りは私が連絡するから！」

「ちよつ、それほぼjy……………」

ピッ、ツーツーツ……………」

「これでよし、と。」

後で何が起こるかなあ……………。

楽しみにできない展開だあ……………。

そーいえば、明日、遊ぶんだっけ……………。

明日また会うのか……………（笑）

つて、笑い事じゃ無いや……………。

はあ……………。

にしても……………。

学校を奪うねえ。

なんか物凄いことになってる……………。

こんなことして何がしたいのかな……………。

なーんてね。決まってるじゃん！

「先生に対抗するため。」

それ以外の意味なんて何もない。

それ忘れたら、意味がなくなる。

覚えてる限りは、何とかなるでしょ？

第二話：電話。 ついでに目的再確認。（後書き）

ちなみに、柚葉は文句を言いながらも結局全員分連絡しました。その頃、江美里は本を読んでいた。

柚葉は、

「絶対江美里は本読んで連絡忘れてる！」

と考え、したそうです。

当たってます………。

流石、柚葉です。

第三話：作戦はもう、スタートです（前書き）

更新遅いです。
御免なさい。

第三話：作戦はもう、スタートです

「で？なんで昨日電話しなかったんだ？」

「あー、それはー。瑠璃、代わりに言ってる？」

「つまり、本読んでたら眠くなって寝た。ってことだよな？」

「うん。」

「……………」

……………に柚葉の殺意が65%混じっているのだが、空気読めない。というか読んだことがない江美里にそんな方法で気持ちを伝えるのは無理、と言える。

今、江美里、柚葉、瑠璃の3人は、Mにて飲み物とポテトを頼み、遊んでいた。

「とにかく、何する？」

「本なら持ってきてくるよ？じゃーん！」

「なんで！？」

「私の家から。」

「私、それならこの子！」

「俺絶対こいつは嫌だから！」

Mの中で営業妨害まがいをする3人。ある意味すごい。

周りも楽しそうに見物していてある意味すごい。

店員の雷が落ち……………ない。

逆に見物のため人が増えるから、むしろ大歓迎状態のM。この世は大丈夫なのか。心配になるが、ここでは大丈夫なのである。幸せな世界である。

「そうそう、そろそろ本題に移ろう？」

瑠璃が言い出す。

「うん！」

「ああ。」

「店長さーん！相談がありまーす！」

今日の本題。それは、
店長さんに協力してもらい、学校奪い取り期間中、ご飯担当になっ
てもらおう。

この話は、他のお店の（サイゼリアとかの）店長さんにも頼み、O
Kをもらっているのです。

3人の取引しだいでみんなの命にまで支障がでます。

さあ、どうなるのか！

の続きはまた次の話です

第三話：作戦はもう、スタートです（後書き）

読んでくれているかもしれない読者様。

皆さんが私への文句を箇条書きにしたらそれだけでA4ノート両面はびっしり埋め尽くされることと思いますが、これからも、時間があれば、読んでください。

第四話・瑠璃の凄さ。(前書き)

いつになったら、7月7日になるのかな？

いつまでもなんないなんてことには……………。

したくない、です。

第四話：瑠璃の凄さ。

「私たち、学校を奪い取ることにしたんです。」

「ええっ！最近はそのなことまでするの？」

「優しそうなおねいさんが店長をしているようで、呼び出しに答えたのはこの人だった。」

「そうなんです！それで、私たちが学校を奪っている間、食料提供をしていただけじゃないかと。」

瑠璃1人が用件を言い、あとの2人はただ、頷いていた。

「うーん、でもねえ。」

「もちろん、こちらにも条件があれば乗るつもりですが。」

「どんな条件でも？」

「出来る限りは。」

「悩みだす店長さん。断つても大丈夫です、と心の中で繰り返す柚葉。御免なさい、と呟く江美里。2人に元の所で待っていて、と合図する瑠璃。気づいて出ていく2人。」

「瑠璃、凄いや。」

「よく言えるよな。あそこまで言えねーだろ普通。」

「私たちに出来たら、世界大変なことになる。法律だろうとも誤魔化せる、瑠璃しか出来ないと思うよ。」

「呑気に恐ろしい会話を始める二人。この世は超非日常だ。」

「交渉終了 お待たせ。」

「ちなみに出て行ってから今までは約20秒。まったく待ってない2人。」

「（分かりきったことだし、聞く必要もないけど、聞いておかないと周りの人が怪しむし、いろいろ聞かれても困るから、本当にいちおう聞くけど）結果は？」

二人は（）内の言葉を心の中で0.0005秒ほどで言い切り、周りの人たちの素朴な疑問パート2の言葉を言う。ちなみに1番は、

「何の交渉？」だ。

「もちろんOK そのかわり、条件があるんだ 私はOKしたよ。2人とも、いいよね？」

「何が？」

「????????」

ちなみに、瑠璃、柚葉、江美里の順だ。

「うーん。よしっ！江美里、相談。柚葉は来ないでね？」

「はいはい。」

「ってこと。いい？」

「で、でも、（私たちの中では、まあまあ常識的な）柚葉が許すかな？」

（）内をこんどは心の中で0・0000000001秒で言って、柚葉の方を見る江美里。

「だます。または脅す。」

「・・・・・・ハイ。」

「いったい条件って？」

「は、次のお話、で。」

第四話：瑠璃の凄さ。（後書き）

先に言っておきます。

ごめん、瑠璃、柚葉！

次回、あなたたちもつと大変なことになるかも。

読者様。

だんだん大変なことになってます。ごめんなさい。

後、この台詞、どこかで見た………なんてものとかありません。たら教えてください。

物語キャラへの謝罪と読者様への謝罪とお願いでした。

第五話：楽しい(?)条件。(前書き)

更新遅れました！本当にすみません。

これからは、早くなるように頑張ります。

第五話：楽しい(?)条件。

「で?なんなんだよ?条件は。」

「大丈夫。死にはしない。私としては、楽しみだし。」

「お前に楽しみみて言われたら、さらに逃げたくなるんだが?」

「はぁ………。なんか今から私がやるのが犯罪行為みたいじゃないですか。」

「にしてもさ……。あくまで私の希望だけどね?」

「脅えるならもうちょっと脅え口調で言ってくれた方がそれらしいし、反論ならもう言っていてくれた方が助かる。」

「乗り気になるなら病院行き決定で、つまりここは賛成も反対もなしに言うこと聞いてください。」

「っていうのが私の希望だけど、勝手に崩れてくれた。」

「江美里!持って来れた?」

「うん。」

「私は目隠しを用意して頂く。……朝から駅前で何がしたいのだろう、と周りは絶対思ってる。思ってるって、マジで。」

「移動しない?」

「駅前の急いでいる気分を無茶苦茶にしろ、そう言われたらやるんだけどね。」

「駅前で急いでる人に悪い。」

「実行したらその場に棒立ちになる人が出そうだから。」

「じゃあどこで?」

「瑠璃に聞かれてかなり悩む。私の家!ってバカか私!?

「カラオケ。」

「それ以外どこがありましたでしょうか。人目のない場所なんて。」

「お金懸かるよ?」

「あ……。」

「ならば!」

「誰かの家は!?!」

「江美里の?」

「私無理。瑠璃は?」

「私も無理?」

「いや、何のことだよ!?!」

「じゃ、どうする?」

「どうしよー。」

「無視?」

とにかく、場所を見つけた私達。そして……………。

「なんなんだー!」

「いや、ね?」

「う、うん。」

簡単に言うと、只今柚葉は……………。

白のワンピース姿です。

つまり条件とは、「1日がいいので、ここで働いてもらえますか?」
で、ある。

もちろん、現代の日本では有り得ない。だが、こつちではありなの
だ。ありなのだ。ありなのだ。とにかくありなのだ。

で、今回の担当説明!!

瑠璃：レジ。柚葉：宣伝。江美里わたし：雑用?

って感じですよ。柚葉に文句言われた気がするけど無視したこともい

ちおう書いておきます。

「さて、今日は終了！おつかれー。」

「帰ろうか。」

「。。。。。」

そして、バイト(?)も終わり、皆で帰った。

ついでに、今日の売り上げはまあまあ良かったことも書いておきます。

ちなみに、その後一週間、柚葉は私達のことを無視していたことも書いておきます。

後で、もう一回謝っとい。

第五話：楽しい(?)条件。(後書き)

次の話はずいぶん学校を奪い取ります。
迫力作れたらいいな、と思っております。

第6話・6・2 I N 6・2 教室！（前書き）

遅れてしまい、本当にすみません！

もうすぐ夏休みに入るので、そうしたら少し更新が速くなるかもです。

第6話：6 - 2 I N 6 - 2 教室！

「へー、24時集合・・・って真夜中じゃん！」

気づいた時には、真夜中集合になっていたらしい。ていうか、無理でしょ。普通の生活をしていれば、小学生は夜家を抜け出すなんて不可能だ。すぐに発見されるって。

「ま、がんばってよ。電気とか、そういうのは話しつけてあるし。」
明日菜って友達によるとそうなるらしい。電気の問題じゃないんだけど。

「明日菜だつて、夜は抜け出せないでしょ？」

「何言つてんの？両親は部屋2階だし、気付く筈ないって。心配無用。」

「えー！？じゃ、私もがんばるよ。」

やるしかない、か。仕方ないし、支度を始める。ちなみに私の家。そして今、私は、真夜中の道を学校向けて歩いている。

「遅いつ！」

なんて着いた瞬間クラスメイトに言われ、悔しい。

「開けるからね？」

瑠璃がみんなに言う。鍵、借りてたんだ。ていうか私一番遅かった？とりあえず、6 - 2の教室へ。話し合いは、そこでしなくちゃね。

「で、攻めてこられたらどうするの？」

誰かの質問。ちなみに今は6 - 2 I N 6 - 2 教室。（ちなみに真夜中。）

「図工室に閉じこもる。」

誰かが答える。なんか本格っぽい。

今は、発言している人以外とっても静か。授業中、こんなに静かだったら違うクラスの先生が飛び込んでくることもないだろうに。

「とりあえず、学校内すべてのカギを持ってこよう。それから、一番よさそうな教室を探そう。図工室より適した部屋があるかも。」

みんな無言でじなずいて、職員室へと歩き出す。

第6話：6 - 2 I N 6 - 2 教室！（後書き）

次は学校の作りなんかを解説しながら進める予定です。

第七話・学校探検で死にかける。(前書き)

本当に遅れてしまい申し訳ありません！

第七話：学校探検で死にかける。

やる人なんか世界中どこを探したっていない。そんなことをやる団体がある。その正体はある小学校の6-2なのである……。

「おーい、おーい？」

「へ？」

「や、反応が消えたから。まさか来たの後悔してた？」

「ううん！全然！」

小声で叫びながら手を大袈裟に振る。

まさかもう少しで実は私達6-2は闇の秘密集団ということに（私の頭の中では）なっていた、なんて話すわけにもいかない。

「変なのー。」

そう言つて、何故か（ま、あたりまえっていったらそのとおりだけど。）柚葉に抱きつく瑠璃。そして瞬間カメラ構える私。なんか、変、とか馬鹿、って日本語をそのまま作りだしたようなグループになれた我らが6-2は完璧に私達を無視しきる。当たり前つちや当たり前前 فقط。

「一通り写真も撮れたし、行こう？」

………反応零。勝手に行かせてもらいますよ。後から来いよー。誰かが助けるっていった気がしたけど、私に助けを？あなたにしては間違った選択をしたわね。

逝きたくなけりや逃げるしかないんだ！！！！逃げても逝くのは確定だけど！！！！

私は遅いけど、走って最後尾につく。そうして暗い階段を下りていく。

ああ、見慣れた場所が不気味。

私達の教室は三階。四階建ての学校の最上階は屋上とプール。階段は二つあるんだけど、そのうちの唯一屋上へと続いていく階段、緑階段から一階まで下ると、鍵なんかひとまとめにしておいてある職員室。

私たちは今その緑階段を下っている途中。もうすぐで、職員室のある一階。そこに知り合いが遅れてやってくる。

「あ、やっと追い付いたの？遅いね。じゃーねー。」

後は聞かないつもりで逃げる、けど出来ない。私の足の速さと力を考えれば当たり前だなあ。さて、逝くか。

私は普通に笑みを浮かべている袖葉を見る。あ、かなりヤバいなあ。本気かも。いったい何したんだろ。

「あ、職員室着いたね。ていうか、学校解体されたら終わりそうじゃない？」

「う、うん……。」

マジで三途の川が見えた気がしなくてもないこの時にお気楽発言しないでよ、瑠璃。仕方ないのは分かっていますが。

さて、進みますか？戻りましょうか？鍵取って早く帰りたいけど、ここにいたいなあ、とも思う。緊張せずにここにいられたの初めてだもん。

「とりあえず、女子は戻って部屋として使えるような教室とか、布団として使えるようなもの探して来い！」

『OK！』

というわけで、倉庫か何かを探して一人で逃げるように歩きだす。もうこれ以上あの空気の中にはいられない。

さて、こんな泊まりもしない学校に布団なんかあるのかな？

第七話・学校探検で死にかける。(後書き)

えっと、写真を撮れたことはありません！

自分の身の保護のために断っておきますね。

後、友達、というか柚葉&瑠璃本物はあそこまで怖くはないかな、たぶんですけど。

第八話：探検って意外続きですね。（前書き）

遅くなりすみません！

何かもう大暴走です。小6じゃこんなこと出来ないですよね。この話。

第八話：探検って意外続きですね。

さて、布団を探し始めた私はこの際今まで見れなかった場所も見ておこつと緑階段の下のドアを開いてみる。そこにあったのは、ドア？また？

で、そのドアを開けると、またドア。しかも懐中電灯がいつぱい置いてある。

で、懐中電灯を持ってまたドアを開けるとそこにはヘルメットがあつて、またドア。

「うわあ。なんだか料理店の話みたいじゃない。」

思わずつぶやく。ドアドアドアで、最後実は人間を食べるところだつて分かつたとかいうあの料理店の話。名前は忘れちゃつた。

そんなことを考えながらドアを開けると、次は鍵、とドア。

……このドア開けたら食べられるなんていやだから。とか思いつつ、ドアを開ける。

布団に食品なんかがある、倉庫みたいな空間が広がっていた。

いや、待て待て！この広さじゃあ学校からはみ出てさらに周りの家をぶつ潰すほどの大きさだよ？まあ、そんなことにとらわれていたのもほんの一瞬。窓の一つもない倉庫の奥にさらに鍵付きのドアがある。さっきの鍵で開けてみたら、道が続いている。ずっと行くとドアがあり、H川近くT倉庫、と書かれた看板がある。

確かT倉庫ってあんま人通りがないから近づくなつて言われてたよね。

「いいこと発見したんじゃない？私。とりあえず怖いし、早く出ようつと。」

駆け足で緑階段の下まで戻る。証拠写真もばつちり撮つたし。後で削除しないとね。この写真だけは。他はいいとして。

「あ、何かあつた？」

このこはクラスメイトであり、仲のいい森さんです。

「うん、みんな呼んでこよ？」
「OK。」

で、説明終了。ああ、いちいち説明をしなくても集まれ、って言うたら伝わる私のこのクラスは本当に便利。

「じゃ、男子たちに合流しよう。一応見つけたんだし。」
で、集まれのみでここまで分かる私のクラス。便利を越して異常ですぬ。

「教室は？」
皆が呟く。あ、そういえばそれ探してなかった。

「大丈夫。いつもの6・2とかでいいよ。」
また誰かのセリフ。ていうか教室ですか。教室で過ごすのに反対意見はないけど、教室は机とがありますよ？あ、出せばいいか。

うわ、質問が何も出ないよ。ある意味凄過ぎだ私のクラス。
とりあえず男子に合流するために、適当に移動を決めて職員室へ歩き出す。

にしても今何時だよ。超眠いよ……。

第八話：探検って意外続きですね。（後書き）

森さん登場です。新キャラは少しずつ出していくつもりです。名前や名前はたくさん考えられないので、名前が付いてるキャラはかなり少ないと思います。
混乱してしまう方、申し訳ありません！

第九話：話す前にメールですか！？（前書き）

遅れてすみません！

第九話：話す前にメールですか！？

さて、私ひとりの寝たいという心の願いは無視されて、そういえば12時に集合したのにみんな眠くないのという疑問にまともな答えでくれそうな人はいないし、深夜アニメを見るわけでもないのによく起きていられるな、皆って。なんて考えていた私は誰かに話しかけられてたのに気づいてなかったよう。

「おーい？」

「わっ！」

約10回目（森さんによると）で、ものすごい驚いた。目の前にいたのは森さんとりんさんで

「またなんか妄想してたの？」

と、2人に呆れられるのはいつものこと。気づけばこれ日常化してるし、昔はやめるなんて言っていたあだ名も慣れたしね。書いてて悲しいことだけ。

「寝たいな、なんて。後、妄想と言わないで。想像です！」

「「や、妄想でしょ。」」

う、否定できない……。他の人なら否定できるのに！この人たち私の知り合いでは超まともだからね。って、私自分がまともじゃないって言ってるようなものだよ。

「っていうか、速く行かない？」

「「もう着いてますけど？」」

「.....」

私って本当にまともじゃないね.....もう認めるしかないよ。

「で？男子たちは何をしてたの？」

そーいえば。というか、眠くないの？寝たいという要求はないの？

「受験でいつもこの時間まで起きてるから。」

「私も。」

心の内をそのまま話せばレベルの違う返事来る。

すごい！私も受験するのに遊んでばっか。というか、そんなに起きてない！

「私、起きてないんだけど。」

そんな風に話していると男子と女子は他の話を始めた。図工室と理科室のどちらがより閉じこもりに適しているか、についてらしい。今日は徹夜としか思えないな、なんて思っていると、メール。

「あれ？うそっ、お母さん!？」

内容は、

「どこいつてるの!？家出なんてしないで早く帰ってきなさい!」以上。

いや、家出よりヤバいことしてますけど。貴女の娘さんは。

「返信送るべきかな……。」

「明日、じゃなかった。明後日送って宣戦布告しよう!」

もう誰かとしか言いようがない、誰かの意見。だって、何人かが同時に言うんだもん。

まあ、いつか。もうなんでも。だから6 - 2なんだもんね。

第九話：話す前にメールですか！？（後書き）

なんかもう、自分の小説に呆れ始めました。次は頑張ろうと思います！

第十話：ただ、眠い。（前書き）

遅れてしまい、すみません！

第十話：ただ、眠い。

さて、私のメールは無視して、話し合い。

とにかくさ、武器になりそうなものを持ってきたらどう？

理科室なら薬品がある。危険な薬品を持っておけばそれだけで少し有利でしょ？

図工室ならカッターとか、ハサミとか、ペンキとかありそうだし。カッターって、刃物でしょ？ハサミも刃物だよな？

というか家庭科室行けば、一番分かりやすい包丁という名の刃物が手に入るよね。

そういう武器って必要じゃない？ほら、こういうときですし。

それに、いざとなったら籠もるって、いざという時に学校壊されたら終わるよね？

だいたい、いつそ6・2に行けばいいじゃん。それが図書室。本読んで暇つぶせるし。

意外性を狙って1年の教室でもいいかもね。

なんて思っても思うだけじゃ伝わらないし。でもとりあえず6・2の教室で睡眠をとることになったの。やっと眠れる！

まあ、認識が甘いって気付いたけどね。

起きて！なんて声が聞こえて目を覚ます。今って何時？ちょっと待ってよ？聞いていないよ？一時間睡眠なんて。小学生なんだし、もつともつと寝ないと駄目だと思います。

眠すぎる……。あくびを我慢して必死で起きてみる。

今から武器を運ぶの？分かりましたって。

私は瑠璃たちのあたりへ歩いて行った。

「あ、おはよー！」

「おはよー。」

答える元氣すらないので無言。

大体私は起きれないんだ！朝より夜の方がまだ起きていられるんだ！
！とはいえ長くて午前2時限界だけ。

「おはよ……。」

何か本当にいちおう返事。いや、面倒なわけじゃなくてね。ただ眠
いというそれだけ。

さて、荷物運びしますか。

第十話：ただ、眠い。（後書き）

次は荷物運びです。何を出せばいいのでしょうか？

薬品でしょうか、刃物でしょうか。

なんか危ないので椅子とかでやめた方がいいんじゃないでしょうか？まったく分かりません。

第十一話：武器集め。（前書き）

本当に遅れてしまいすみません！

第十一話：武器集め。

で、まず行ったのは理科室。

「ん〜？」

「これいるかな？」

「あつてもいいんじゃないかな？」

「えっ？何かにそれ使いそう？」

「おい、これなんて言うんだっけ？」

「試験管だったかじゃね？」

「それ、使えるのか？」

「さあ？」

気分は実験前に使いそうなものを集めてる生徒たちって感じかな。

それだったら、こんなに真面目ではないけども。

にしても、皆携帯持ってんのになんで家から連絡こないんだか。聞いてみたら

「電源切ってるから」

わお。じゃあ連絡来ても気づかないよね。やっちゃいけないと思うけど。

「これ、塩酸だよね？」

と、私。

「ラベルに書いてあるけど？」

と、柚葉。

「塩酸ぶっかけたらどうなるのかな？」

と、瑠璃。

「ヤバいことになると思うよ？」

と、私。

「やるべきじゃないと思うよ？」

と、柚葉。

肌が溶けたりしそうだし。そういえば、シャンプーを水に溶かすだ

けでも武器になるよね。あれ、目にしみるから。

「よし、水素ないかな。水素」と、私。

「「なんで？」」
と、2人。

「あれ、よく燃えるんでしょ？」

で、火で取り囲めば動けないし。おお、我ながらいいアイデア。まあ、なかつたけど。

家庭科室では、針だのハサミだの包丁だのフォークだの、後、油や塩に、石鹼なんかをいただいて、理科室では薬品とビーカーやらを、
いただいて、その他ロープやらを頑張つて集め。

ああ、疲れた、なんて思ってたら、はい。

来るであろう人たちが、そして来てくれないといろんな意味でかなり不安になる人がやってきたわけである。

超簡潔に言ってしまうなら、これ以外いいキャッチコピーが分かりません。

毎日見る、そして休みに入ってから全然見なくなった人たちと、授業参観でよく見る人たち。

先生一同と保護者様様のご登場、と言えば誰にだつてわかるよね。

時刻は午前十時でございます。って、こんなたつてた!?

第十一話：武器集め。（後書き）

次、戦闘っぽいことをすると思います。
下手だと思えます。

第十二話：戦争、始まる？（前書き）

遅れましてすみません！

第十二話：戦争、始まる？

「うわっ！来た！」

いや、そりゃ来るでしょ。こいつは中田さん。この計画を立てた一部の男子たちの中の一人。

「ちよつとマツチとアルコールランプとアルコールと紙かなんか持ってきて？」

指示された通りのものを男子たちに届ける。

……バケツに水を用意しておくべきだな。何するのか何となく分かった。

私の目の前には、火をつけた紙、火をつけたティッシュ、その他火のついたアイテムを先生両親連合軍に放り投げる（放り落す？）男子達がいた。

「おうわっ!？」

「ひゃえ!？」

そりゃ、驚きますよね。さてと、水くんでこよー。

先生たちの説教が聞こえるけど無視した。今は消火するのが最優先だと思う。

火事になるのは避けたいですから。

「おりゃ。これでも食らえ？」

放水隊と放水隊がかわるがわる火と水とを投げつけるといふ逮捕されて当然の事を開始する私達。

まあ、火の始末はしてますし、出来る限りのことはやっているってことで。

「よし、もつと火をつけろ！」

「水、誰か水とってこい！」

「マツチ足りない！誰か持ってこい！」

「バケツ、もつと用意して！」

これだけ聞くと、花火大会か何かをしているようにも思えるけど、

実際やっているのはテレビで放送されたら「絶対に真似をしないで下さい。」とか書かれそうな危険な行動でございます。

「ちよつと止まれえ！」

先生の一人からストップがかかる。

放水隊、ストップ。放水隊、ノンストップ。放水隊、急いでお仕事スタート。

結果、誰も命令を聞かなかった。

「……。」

先生、その他保護者様、無言。

「聞いちゃいねえ！」

いきなり突っ込んだ！おお、今のはなかなか的確かつ意味の分かりやすい突っ込みですね。

「えつと、ストップ！」

「？」

誰かが叫んだから、いったんストップ。先生の言うことは聞かないのにねえ。

「とりあえず、次の武器を用意しようよ。」

「さんせーい！」

これには、新たな武器でもっと大惨事を起こしたく、火を扱うのに飽きた人。それから犯罪ギリなことをもうしたくない人たち。この二種類に分けられる。

「待ったあ！」

先生たちの叫びは無視だ無視。無視、無視だ。無視するんだあ！

と、まあ私達の戦争はここから始まった！

って、ここからのの！？いままではなんだったの！？

第十二話：戦争、始まる？（後書き）

いまから本格的にバトルスタートです！
今までの序盤なのかよって突っ込みは、なしの方向で頼みます。

第十三話：いろんな意味でいろいろなものが粉々に。 (前書き)

おくれてすみません!!

第十三話：いろんな意味でいろいろなもの粉々に。

「おい、薬品のビンをこっちに傾けようとするのはやめて、話を聞け！」

『ふぁい？』

あ、ちなみに薬品は塩酸だとか。って、危険すぎるよね！？やめなよ！！

「まず、出てこい。」

率直な！！

『ヤダ。』

即答かよ！！

「……………」

そりゃ、無言にもなるよね。

「で、なんで来たんだよー！」

中田さんっ！？親が泣き出しちゃいましたよ！流石にひどいですっ！

「奈ター！出てきなさい！」

「涼！？どこにいるの！？」

というか、暑い中ご苦労様です。水か何かをお出した方がいいのかな？

「いや、いいですよ。」

「逆に困るだけだつて。」

順に瑠璃、柚葉。いや、暑い中ご苦労様です位は……………いらないか。

来たくて来たんだし。

「ねえ、私、パソコンしたいな。」

「視聴覚室に行きたいね。パソコン使えるの、そこぐらいじゃない？」

にしても、親を目の前にお気楽な……。まあ、いつか。私のクラスはそういうクラスだもんね。

男子たちは、先生と何やら叫びあっている。たぶん、

「今すぐ出てこい！」

『嫌だ!!』

みたいな話し合いだと思う。

女子連中はアイスを食べつつ、水を用意してみたり、男子連中にアイスを渡して見たり、いろんな武器を用意してみたりと、まあ、暇を持って余すというか、そんな感じ？

普通はそんなことしてちゃ駄目なんだけどね。

「くっ……。明日、必ず引っ張り出して見せるからな！」

捨て台詞的な台詞が聞こえた気がして、下の方を見ると先生たちが帰ろうとしていた。

『さよーならー!』

うおい!何元気に別れてるんだよ!

こうして、第一段階の大きな壁を粉々にぶち壊しに(自分たちの両親の心を粉々に)して私達の戦争はいちおういったん準備期間に入ったのである。

さて、次はどうすることになるんだか。

第十三話：いろんな意味でいろいろなもの粉々に。(後書き)

やっと、次の準備期間に入れますね。

それから……。

皆様、たくさんの感想や評価、本当にありがとうございます……これからがんばります！

第十四話：休憩しつつの雑談（前書き）

おくれてすみません！

第十四話：休憩しつつの雑談

「さて、他に必要そうなものを言っていこー！」

『おー！』

はい、驚くべきこの話し合い。あれじゃ、不十分なのか！？

ちよい待てよ。分かるよな？あれでも十分連行されていいレベルだぞ！？

……………あ、えっと、なんか口調変わったた？

うわ、私ったらまた向こうの世界へ行っちゃったのか。

じゃなくて！おいおいおい。

「あれでも十分に危険だと思っただけど。」

思わずつぶやいてしまうけど、皆の、氷を頭の上から落とすのは？という提案に対する肯定または反論の戦いのせいで、誰も聞けなかったと思う。

結果、考えるのは明日にしようと思いがまとまり、休憩タイム。

問題です。修学旅行の夜にすることと言えば？

正解は、朝までトークでした。

「で、何する？」

瑠璃&柚葉に話しかける。

いや、この二人を見るのって、かなり楽しいから。

「なんか、台詞読んでもらおっか。」

と、これは瑠璃のセリフ。

「じゃあ、これは？」

案をテキストに出すのが私や瑠璃の役目で、

「あ、了解。」

実行するのが柚葉という……………。

このパターンが最も多い。そしてここから、まあ、瑠璃と柚葉が仲よくしているというか、柚葉が瑠璃にいじられているというか。

あ、私？見学してますよ？助けもしなければ、まあ、加わりはするけどね。

ヤバいと思ったら、カメラ向ければ離れるからね。

一回ぐらいツーショット……いえ、なんでもありません。

2人の話し合いはついにむちゃくちゃな方向へと走ったらしい。

「私はNで、柚葉がDMなだけだった！」

「お前がDSなだけだろ！？」

私の意見としては、瑠璃がSで、柚葉がM何だと思っただけど、皆さんはどうでしょ？

毎回やる瑠璃も瑠璃だけど、それで逃げない柚葉も柚葉だって。

「だから、私はNなの！柚葉がDMなんだよ！！」

「お前がDSなんだろーが！！」

ああ、眠れねー。

そんなどうでもいいじゃん。SとMでぴったりってことで。

第十四話：休憩しつつの雑談（後書き）

さて、次は何を出すべきなのでしょうかね……。武器になりそうなものってあまりありませんけど……。

第十五話：独白的なものと役割分担。（前書き）

遅れてすみません！更新ペースを上げたい、それと話を進めたくて仕方ありません。次は雑談をぬくべきでしょうか？

第十五話：独白的なものと役割分担。

「で、なぜ起きて早々くるんだ先生方!？」

朝g……いえ、言っちゃいけないことでした。戦闘の準備が出来てないのに!これでいい?

「というか、先生方、暇人?」

とにかく、先生たちの生徒に対する思いはよく分かった。ちょっといえ何でもありません冗談です!

本音を言うと、管理されてるみたいって、はい、犯罪の枠超えて何言ってるんですよね反省はしませんよ当たり前じゃないですか。

こんなノリで進めてくと、ナレーションがおかしいってなるので、少し冷静に行きますね。え?すでに正気じゃない?人間の神秘ですよ、感じ方の違いですよ。

こほん。話を進めましょう。話を迷走させたのは私ですが?言っちゃだめですか?

「脳内暴走はいい加減やめて。」

なに?ちょーっといつもよりもってだけです。脳内暴走なんて、誰がいつ、そんなことを?

こんな反撃すると、確実に柚葉に呆れられる……別にいいんだけど、もう、馬鹿ではないので。

馬鹿よく言われるし、言われるのが本気でムカつくけど、馬鹿ではないので。

いちおう、漢字テストで20点中1点とか日常っていう賢さだよ?私ある意味すっごーい!人間ポジティブじゃなくちゃ。

なあんていつものように頭の中で誰かと会話していたら、

「っーことで、今回も燃やして逝きましょうー!」

「おー!」

逝っちゃダメだろおい。

「今回も水まくぞ……………」。

『おー……。』

こっちテンションひくっ！まあ、毎回お疲れ様です。

私どーしょ。補充担当しよっか。そっしょう！バケツと水、どこかなあ？

第十五話：独白的なものと役割分担。（後書き）

今回は、繋ぎみみたいな感じですよ。

次こそは新展開、意外なものを見つけるはず！ですよ。

第十六話：つか展開がなさすぎませんか？って台詞はなしで。(前書き)

遅れました！はい、題名ですか？私の心情です。

第十六話：つか展開がなさすぎませんか？って台詞はなしで。

さてと、バケツでも用意しようかと思ったのだけれど、何を違えたか、ただいまフォークなどの食器類が落とされているのでバケツを取りに行っても無意味だとよおく分かりました。

江美里、大ピンチ！このまま話が進むと、私達の成績が大変なことになります！

だからといって、素手でつかもうとするわけにもいかないのです、どうしようもない。

こういうときは、とりあえず思ったことを呟くに限る。

「なにか、ネットみたいなもの？そんなものがあればとりあえず落すは防げるよね。」

ちよつと呟いてみたら、しなくちゃいけないことが分かった私凄いです。プールの掃除用のネット！そっぴやプールは英語でpoolだったけ？って、それはどうでもいい。

えつと、確か……。

「瑠璃、プールの鍵どこ？」

聞いてみたら、瑠璃即座に。

「プールの鍵？確かこのへんにっつと。」

といっつて、バツクから、いろいろ取り出しつつ探してくれました。

「ごそごそ、ごそごそ………はっけーん！プール（pool）の鍵

！てか、なぜ瑠璃のバツクから鍵が？

まあ、気にするべきじゃないんだよね。

「えつと、school poolで学校のプールだったけ？」

ちよつとでも覚えたら言いたくなるお年頃なのです。読者の皆様、

馬鹿と思わないでください！

この英語知識？確か友達に聞きました。皆賢いよね。私だけなの。

私以外、歴史地理の成績の悪さゆえに二教科以外塾で習ってない馬鹿な受験生はおりませんよ。

緑階段からならプールに行けるから、さてとプールまでダッシュ
駆
け足！

第十六話：つか展開がなさすぎませんか？って台詞はなしで。（後書き）

あー。つまり、結果的に炎、塩酸と来た次の武器は案外地味に食器類です。

いや、シャンプーを水にかしたものでも充分過ぎたんですけど、少し小学生の枠を超え過ぎたので、戻ろうかなと。

まあ、英語とか正直に言うとな私に小学6年の頃はアルファベットの並び順すらよくおぼえてな……。いえ、今の記憶から抹消してください。

あ、ジョークかって？だったらどれだけいいことでしょう。

はい、あとがきだけ異様に長いですが次は本編も長く長くなる予定？だと思っているので大丈夫だと信じたいです。

中間テストの馬鹿野郎！と叫びたいです。先生、採点なんてしないでください。

第十七話：盗聴はばれないのが前提ですよ。（前書き）

はい。おくれてすみません。サブタイがどんどん長くなっていますよね。

やっぱり短くすべきでしょうか？

第十七話：盗聴はばれないのが前提ですよ。

そして今私は疲れ果てています。

走ったよ？三階の緑階段から四階のプールまで。

文化系になんてひどいことをしてくれるんだ！この学校。

「で、確かプール用具入れにあったはず。えっと……あれ？」

プール用具室に入って、呟きつつ探してたら不思議なものを発見。

「こ、これは……。」

いや、呟きが多くねって言わないで。誰だって言う。

「何故にキーボード!？」

あ、パソコンのじゃなくて、ピアノの方。

しかも電源入ってるし。もったくない。ちょっとひいてみよう。

「ドレミファソラシドと。ドシラソファミレド。」

わあい。ひけたひけた。わたしすごーい。(棒読み)

とにかく、このキーボード、持ちかえってみるか。

つと、あれ？やけに重い……？って！

「これはないだろ。」

もう、呟き多いって言わないで。

さて、レポートを書いてみよう。

観察

四角くて黒くて、映画で見ると無線と呼ばれる部類のものに近いケイジョウウ(形状)をしている。

漢字は後から調べたのを横にキニユウ(記入)しました。

まとめ

カンペキ(完璧)に無線と思われる。つか、誰が置いたんですか？

「と、とりあえずほしいものみつけたし、ねっただけもってもどろ

おっと。」

はい、私、嘘下手すぎるっ！平仮名だよ平仮名！

「さあて、もどろつと。」

念押しを必死でやる私がんばかしい……。

カタカタ、ガラッ。カツカツ。

でも出ない。出たふりを必死で演じてみる。 頑張るんだ江美里！

A 『あ、出たみたいですね。』

B 『しっ！もう少し声を小さくしろ！』

A 『あ、はいです！』

えっと、最初についてるAもBも言ってるのでつまり、

『A。あ、出たみたいですね。』

『B。しっ！もう少し声を小さくしろ！』

という感じの会話なんですけど、ちよつと改良してみました。

つか、Bさん？つか、隣のクラスの先生。貴方の方が五月蠅いです。

A 『えと、さつき、これはないだろ。って言ってませんでした？ばれてるかもですよ？』

あ、やばっ！

B 『きつと、キーボードの重さに驚いていたのだろう。』

A 『あ、先s……いや、B、凄いです！』

私もほめてあげよう。その勘違い、すごいです！

B 『で、さてさて、この《盗聴して何とかして引っぱり出し大作戦》はまず誰かがこのキーボードを持って行ってくれないと意味がないんだが……。』

A 『重かったでしょうか？』

真剣に悩んでいるらしいけど、これ、小学生に持てる重さじゃないですよ？男子二人でやつとかな？

少なくとも文化部江美里ちゃんには無理だもん！はい、カワイ子ぶってみましたあ。私馬鹿みたあい。

つか、そのまんますぎるネーミングですね。

B 『とにかく、作戦を知るために昨日の夜必死で学校の壁よじ登ってとりあえず置けたこのプール用具室にこの細工されたキーボードを置いて……。』

A「本当は中に入るつもりだったのに、鍵ちゃんと閉まってるって困っちゃいましたね。」

貴方達の教育の賜物ですよ。あ、誉めてますよ？30%位。

にしても、これ、盗聴に近いですよね？つか、盗聴言いましたよね？犯罪なのかな？

私はまず警察に連絡するか、6・2に連絡するか、5秒悩んでクラスの方へ音をなるべく立てずに走って行った。

第十七話：盗聴はばれないのが前提ですよ。（後書き）

先生たちは普通このようなことはしないとします。

この先生たちは子供の心をたぶん忘れてないんだと思います。

繰り返します。現実はこのような先生はきつといないはず。

後、盗聴はしちゃいけないと思います。きつと駄目だと思います。

この世界だからできるだけです。

長くなりましたすみません。

第十八話：軽くすませるのってやめるべきだと思っ。(前書き)

はい。遅いです。本当にすみません。

その上もはやタイトルの意味が分かりません。

第十八話：軽くすませるのってやめるべきだと思っ。

「盗聴しようとしてされてるんだけど。」
さて報告してみました。

『嘘でしょ。』

はい、信じてもらえませんでした。しかも声そろえて異口同音に言わないですよ。悲しくなるから。

「ねえ、見せてよ。盗聴機。」

「瑠璃？興味あるの？」

「いや、ね？」

…………… 早めに帰ってこよう。

つ、ついたあ……………。疲れた……………。

「あのさ、疲れ過ぎてない？」

瑠璃が不安そうに聞いてくる。でも、あんま時間を使いたくない。ばれてるってばれたらヤバいし。

「あ、ははは。で、黙ってれっつー。」

とりあえず誤魔化して、さっきのキーボードのところに連れていく。

A『せ、いえ、B！あの子たち、次はアルコールと火を同時に落とってきてるんです！』

B『なんだって！？流石にやばすぎじゃないか！？』

A『いえ、あたったら焼死体が出来あがるだけですから大丈夫です。』

『

それは大丈夫とは言いません。

B『それは大丈夫ではないぞ。最悪と言うんだ。』

A『ですよね』

さわやかに言うな！つか星マークで語る状況ですか！？

A「でも平気です！万が一のために消防車を五十台お借りしましたから！見学のためについて言ってお願ひしたら、嬉しそうにOKと言ってくれたんです！この町の人は優しいですね！」
声から嬉しさが分かりますけどそれは貴女のような容姿が素敵なお方のみ言える言葉ですよ。他の先生が頼んだら、即断されていたことでしょう。

B「そうですね……。学校の中に入られたら厄介かな。」
瑠璃の結論。もし万が一、こちらの作戦が漏れるなんてことになる
と困るから、だそうだ。

A「でもさ、入れるはずが……。あ。」
マスターキーとかあったら駄目か。
「つーことで。バリケード作ろう。」

第十八話：軽くすませるのってやめるべきだと思う。（後書き）

はい。バリケードづくりのアイデアは水無月修羅さんよりです。ありがとうございます！

さて、つくろうと言いたいところなのですが、大人たちの視点から少し時間を戻して見に行きたいと思います。振り返りですよ。ろくに進んでないのにすみません。

大人たちの視点から、はマツキさんよりです。ありがとうございます！

あ、もしも名前を書かれるのが嫌でしたら言うてください。すみません。

第十九話：視点チェンジしたけど……？（前書き）

更新遅れました！本当にすみません！

第十九話：視点チェンジしたけど……？

さて、彼女は6・2のとある生徒の母である美咲さんである。

保護者のまとめ役な彼女はこの夏起きた事件でもまとめを担当するリーダー格。

そしてこの状況にかなりの「絶望」を感じていた。

「ああああああつ！もうっなんでこうなるのよっ！」
髪は黒く長く、スタイルはモデルのよう。

いつもおしとやかで、母親たちの注目の的。子供の憧れな彼女がヒステリックに叫んでいた。

「必死だったのよ今まで！頑張つて、頑張つて………！なのになんのよっ！」

今まで作り上げてきた美咲の世界は、ほんの一瞬で崩れ去った。

たった一瞬。十二年かけて作り上げてきた夢は美咲から逃げて行って、奪い取られて。

「とにかくくっ！美海^{みみ}わかったわねっ！？家に電話が来たらてきとーにやり過ぎなさい。」

物静かにただ本を読んでいた少女がこちらを向く。感情のない眼が美咲を見つめる。

「わかりました。お母様。」
感情がない、静かすぎる声。

「あなたには高校受験があるのだからねっ！ちゃんと、頑張るのよっ！」

バタンツ！

「美咲さん！」

先生が駆け寄ってくる。若くて愛らしい、通称A。

「どうか、しました？」

見れば即分かるのだが、万が一想像範囲外のことをやらかされたら困る。というよりやらかしている可能性がある。それゆえの質問だった。

見たところ、水と炎が落とされているのみだが……。

「アルコールと火を同時に落とされて大変なことになってるんです。あたったら焼死体が出るだけです。」

予想以上だった。

「十分な危険が感じられますよ。水がたくさん必要です。後、水素はありますか？」

万が一、水素があつたとしたら？

ここで科学の問題に入る。

水素と酸素の混合気体に火をつけたら？

答えは簡単。爆発だ。

「発生させればありますよ。」

な、慰めになんねーよ！

思わず突っ込んでしまう美咲だった。

第十九話：視点チェンジしたけど……？（後書き）

母親の気持ちって難しいですね。
子供たち視点に戻します。

第二十話：バリケードって、作るの案外大変そうだよね（前書き）

遅れました！すみません。

理由は、期末テストとまあ、自業自得な宿題なのです。

本当にすみません。

第二十話：バリケードって、作るの案外大変そうだよ

「で、バリケードと言われましてもね。」
と、私。

いやはや、この年でバリケード作ったことある人間の方が希少ですよ。

「とりあえず、机とか椅子とか、必要そうなものを探そう。」
と、瑠璃。なるほど。確かにそうするべきだ。

「じゃ、いこつか、瑠璃&柚葉。」

テキトーに面子を集める。いやさ、私の行動範囲は恐ろしく狭いのさ

「うん。」

「ん。」

順に瑠璃、柚葉。

ふう……。さてと、行きますか。

「机運ぶよー。」（瑠璃）

「重いから椅子がいい。」（私）

「おーい、そこ。机運べ。」（柚葉）

「ここは頼んだぜ！」（瑠璃&私）

「まじめにやれ！」（柚葉）

そんなこんなでまじめ(?)に机を一階のホールに運ぶ。ただ、流石に今からバリケードを作るとばれるので……。

さてさて、作戦。

盗聴されていることを利用して、デマ情報を流す。

時間稼いで、バリケード作り。

以上終了。

でっ、デマって何を流せと？

第二十話：バリケードって、作るの案外大変そうだよね（後書き）

次からは早く更新できるといいな、なんて思っております。
有言実行、したいです。

第二十一話：江美里の三十分クッキング？そのいちっ！（前書き）

更新できました！この私が、この私ですよ！と喜んでおります。
内容も頑張ったような？いえ、頑張っていると信じたい……。

第二十一話：江美里の三十分クッキング？そのいちっ！

たららっ たたらららっ x 2

江美里の三十分クッキング！

ってなんじゃそりゃ。そういう突っ込みはいりません。

今日はバリケードの作り方をご紹介いたしましょう！

まず、バリケードを作る際に敵に帰っていたかどうか必要があります。
では、早速やってみましょう！

盗聴中の先生の会話

A「大変です、B！」

B「ん？どうした？」

A「生徒たちが水素を発生させるつもりの方です！」

B「あいつらは馬鹿か！？」

A「なんでも、『先生たちがいつまでも帰らないし、ここは爆発でも起こして帰しちゃおう！』ということのようです！」

B「学校を破壊されては困る！つか死ぬぞ？生徒もろともサヨナラの可能性だぞ？一時撤退だ！」

A「分かりました！」

成功です！

次に材料を用意しましょう。敵に帰っていただく間に用意しておく
と効率的ですよ！

ここでは、今ある材料で作ろうと思います！

では、こちらの表をご覧ください！

材料（分量はなるべくたくさん作りたいときの分量です。各自で調節ください。超フリーダムですが、それがなにか？）

机：あるだけ。多ければ多いほど良し！

椅子：これもあるだけ。沢山ご用意ください！

ボールを入れるかご：こちらもあるだけご用意ください！ボールは入れたままで。

砂：ありっただけご用意ください。水につけてどろどろにするのがポイント！

レジ袋・ビニール袋：用意した砂が全部入り切る位にお願いします。小分けにしたいので、小さいものを！

スズランテープ：何色でも。ただたくさんお願いします。

ロープ：頑丈なものを用意しましょう。沢山どうぞ！
こんなもんです。

まず、机を並べます。上にどんどん重ねていくといいと思います！たくさん重ねられたら、砂（泥？）をレジ袋又はビニール袋に詰めます。

そして、机の引き出しみたいところにどんどん詰めましょう。重ねるのは絶対に先にしてくださいね？重ねてからじゃないと持ち上げるのに疲れますよ？

一番下の机には、ちゃんと椅子もセット。えへん、いい子でしょ？後は、ロープでドアの取っ手を固定。開かないようにします。

そして、スズランテープで机を固定します。
完成しました！

「ね、江美里、どうしたの？」（瑠璃）

「さあ？どうせまた妄想じゃない？」（柚葉）

第二十一話：江美里の三十分クッキング？そのいちっ！（後書き）

次も早く更新したいですが、明日は無理です……。本当にすみませ
ん。
でも、頑張ります！

第二十二話：成功したということにしてください。（前書き）

遅れて本当に申し訳ありません！

期末があつて、なかなか更新できなかつたんです！

本当に申し訳ありません！

第二十二話：成功したということにしてください。

ま、そんなこんなで一階も二階も嚴重警備。というか一階はまじめにクツキング通り。二階はガムテで窓をべたべた貼りつけて。三階はてきとーにガムテを張るだけだったのが悲しい。

え？材料に書いてなかったって？しかもこの料理、載ってなかった？三十分の番組じゃあれが限界なんですよ。察してください。つーことで、かかった時間、何と一日！

ちなみに、次の日学校来た先生が

「おめーら何やってんだ！」

「あなたたち何してるの!？」

当たり前だけどびっくりしました。はい、本当にごめんなさい。とはいえ、侵入を防ぐのが目的だし、仕方がない。

仕方がないのでお手紙かーいた『先生今日はお帰りなさい』で、まあ引き下がるはずもなく、火炎投下。

いろんな意味で犯罪になりかけただけど気にしなーい。

さてと……………

学生の本業は勉強？馬鹿らしい。

学生の本業は遊びってことで。

『もつとやったるっ!』

鬼？かもしれませんが、別にいいじゃん。

火炎投下、器物投下。

よい子も悪い子も普通の子もちよっといいい子もちよっとい悪い子も
(以下略)

とにかく、真似しちゃいけません！

ちよつとずつ、進めてくぞこの道を！
ぜったいに戦争に勝つてことで作戦会議始めなきや。

第二十二話：成功したということにしてください。（後書き）

次回こそ早く投稿したいです。

本当にすみませんでした！

第二十三話：会議って大切だけど長長話するのは面倒であーあ、となりませんか？

更新が遅い＋タイトルが異様に長いですみません。本当にすみません。

春休みももうすぐ終わりですね。宿題終わってるぜ、なんて思ってる人がうらやましいです。

第二十三話：会議って大切だけど長長話するのは面倒であーあ、となりませんか？

「で、どうするよ？」

瑠璃が爆弾級の質問を放った。

聞いてみてすぐ答えが返るようならいいんだけどな……。

そういうマシーン作ったらいいと思う。

地球温暖化の解決法とかさそーゆーのとかも尋ねられるって設定で
実際はまあ、宿題を入れたら自分の筆跡で答え書いてくれる程度で
この程度で満足して差し上げましょう、えへん！

「……えとさ、1人変な方向に飛んでるから、4人で話そうか」

瑠璃が司会進行を務めるこの班は、その他柚葉、森さん、りんさん
を混ぜてお送りいたします。

つてちよつとお！

私は反論を開始する。

「無視はひどくない瑠璃！？みんなも何それが一番正しいみたいなの
表情なの!？」

「「「普通そうでしょ」「「「

残り（柚葉、森さん、りんさん）のとどめがぐさりと刺さり、私の
心はノックアウト。

「……とりあえず、馬鹿はほつといて。話し始めるよ」

平然と私を切り捨てる瑠璃にいじわると叫びたい。

「塩酸とか水素とかを使うのをやめなければどうだっていい」（りん
さん）

「同意見」（森さん）

「いいんじゃない?」（瑠璃）

「反対意見はない」（柚葉）

「んー、ま、おかしいとは何処にもないような気がしないでもな
くもない」（私）

あれれれれ？何かおかしくね？

……ま、いつか。気にしても仕方がない。
とりあえず、ま、意見まとまったし。
「「「「「かいざーん」「」「」「」

ほかのグループも同じ考えだったらしくて、結果特に変わらずでいい
つかあなんて言うので決まった。
つまり、第二部れつつござってことで。

第二十三話：会議って大切だけど長長話すのは面倒であーあ、となりませんか？

さて、次こそ早く更新したいです。いつも出来てませんが、
ちよっとずつ、両立したいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3493g/>

学校を、奪い取れ！

2010年10月11日21時04分発行